

■目 次

第 13 回年次大会特集	2
大会総括 2 プレカンファレンス 4 パネルディスカッション 1 5 パネルディスカッション 2 5 オープンフォーラム 6 石井米雄奨励賞選考結果について 8	
第 14 回年次大会概要	9
地区研究会報告	9
北海道・東北 10 関東 11 関西・中部 12 中国・四国 13 九州 14	
2014 年度理事会議事録抄録	15
第 1 回議事録抄録 15 第 2 回議事録抄録 16 第 3 回議事録抄録 19	
お知らせ	21
地区研究会のご案内 21 Web 委員会より 21 学会誌について 21 会員新著紹介 22 事務局より 22 新入会員紹介 23 関連学会情報 24	
編集後記	24

■CONTENTS

Report on the 13 th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations	2
Overview of the 13th Annual Conference on Japan Society for Multicultural Relations 2 Pre-conference Workshop 4 Panel Discussion 1 5 Panel Discussion 2 5 Open Forum 6 The Ishii Yoneo Award 8	
JSMR 2015 Annual Conference	9
Reports from the Regional Study Meetings	9
Hokkaido・Tohoku 10 Kanto 11 Kansai・Chubu 12 Chugoku・Shikoku 13 Kyushu 14	
Records of the 2014 Board Meetings	15
Announcements	19
Announcements on the Regional Study Meetings 21 From the Web Committee 21 JSMR Journal 21 New Publications 22 From the Business Office 22 Introducing New Members 23 Other Conferences 24	
Editor's Notes	24

第 13 回年次大会総括

— 「多文化関係学会 2014 年年次大会（福島大会）を終えて」 —

石黒武人（明海大学）・中川慎二（関西学院大学）・李洙任（龍谷大学）

福島市で開催された第 13 回年次大会は、新しい手法で企画、運営された点、また、アカデミアの責任を問う内容を大会テーマとした点において、年次大会の運営並びに学会のあり方を再考するうえで布石となる重要な大会であった。多文化関係学会創設時に掲げられた目的は、(1) 多様な文化の相互作用およびその関係性を、多面的かつ動的に研究すること、(2) 急速に変化する社会事象の中で、文化差から生じる軋轢・摩擦の背景にあるも諸要因を解明し、教育、実践に活かすことであったが、「相互作用」、「関係性」、「動的」そして「実践」といったキーワードが示唆するように、「多文化」や「異文化」を対象とする既存の学会とは一線を画するスタンスをとり、差別化を図ることが一つの重要な目的であった。しかし、本学会は、特に(2)の「実践」という視座からは、日本で起こる外国人に対する差別、偏見、排除という問題に積極的に関わり、社会に発信していったのかという大きな疑問が残る。また、学会運営にしても「同じ人たちばかり・・・」や「他学会とあまり違いは見えない・・・」という厳しい意見が聞こえる中で、多様な人びとを巻き込み、新しい活動に着手する動きは緩慢であったことは認めざるをえないであろう。

以上の経緯を踏まえ、本大会では、社会的な実践に関わる基調講演者、パネリスト、ファシリテーターを軸に据え、また、運営方法も新しい手法をとった。後者の運営については、通常の大開催は、理事の勤務先大学が会場となり、その理事を中心として大会準備委員会が設置されてきた。この方式では、大会委員、とりわけ大会委員長への負荷があまりにも大きく、このままでは引き受け手がなくなるという意見があった。また、年次大会の運営費用を学会の予算に入れ、年度初めに総会を開き、予算執行できるようにした。将来的に年次大会を持続可能なものとするためには、従来方式に加え、新たな運営形態が求められていた。そこで、運営委員を「世話役」とし、大会会場を担当理事の勤務先（当番校）とするという縛りから解放し、初めて大学以外の場所で開催した。さらに、福島大学、FIA（福島県国際交流協会）、哲学カフェ@福島からの協力を取り付け、地域のメディアにも積極的に働きを行った。結果として、地元の人たちが多く参加してくださり、福島民

友が記事を掲載する（南相馬市観光ボランティアガイド安部あきこさんの語りを熱心に聞き入る、2014 年 11 月 8 付）など地域社会と協力関係を築きながら行う大会の重要な一事例となった。



本大会では、多文化関係学会にとって最も重要な課題の一つである『『他者』に対する社会的排除と差別：少数派の視点から考えるアカデミアとメディアの役割と責任』をテーマとし、福島市での実施が決定された。3.11以前にもあった主に原発問題の周縁化、排除、差別の関係性に加え、3.11以後、とりわけ原発事故発覚以降、日本社会の様々なところで排除・差別の新たな関係性が増幅生成され、状況は悪化している。「多文化共生」という言葉が最も輝いてみえた時代は一昔のような気配となり、排除・差別が顕在化している。ヘイトスピーチに代表される排外主義団体の台頭は最たる例であり、原発被害を受けた人びとを含む社会の少数派に対する排除、差別はエスカレートしている。これは、もはや一部の差別者だけの責任とは言えず、社会全体の責任であり、とりわけ教育の問題である。その意味でアカデミア全体、本学会、もしくは研究者の在り方も問われているのである。

以上のような問題意識を持ちつつも、私たち研究者は東日本大震災という現実を目の当たりにしたとき、自らの無力さを痛感せざるを得ない。研究者として、被災者という少数派の内在的な視点に立とうとするが、現実には支配的社会のなかで日常を暮らしているために、多数派の制度にからめとられながら、支配層の視点から「歪曲された」形で研究・教育活動を行いがちであり、その姿勢はやはり傍観者的といわざるを得ない側面がある。このような現実を踏まえながら、研究者と社会との関係性とは何なのか、また研究者は何をなすべきかという最も重要な問いを確認できた大会となった。

プレカンファレンス

「東日本大震災被災地を訪ねるフィールドワーク： 震災、津波、原発事故一ふるさと回帰と菜の花プロジェクト」

今年度のプレカンファレンスでは「東日本大震災被災地を訪ねるフィールドワーク」というテーマの下、地震、津波、さらには福島第一原発事故の被害を受けた各地を訪問した。

フィールドワークに先立ち、出発地点である道の駅南相馬で、同市の観光ボランティアガイドとして震災の語り部活動をする安部あきこさんによる紙芝居上演が行われた。紙芝居では、震災・津波・原発事故の体験と、放射能汚染からの農地再生を目指してナタネの栽培と菜種油の生産を行う「菜の花プロジェクト」の取り組みが語られた。

この後、安部さんのご案内でフィールドワークへと出発した。バスで各地を移動、見学する中で、震災当日に避難場所でありながら津波の直撃を受け、多くの避難者が犠牲となった「みちのく鹿島球場」、津波に呑み込まれた防風林の中でただ一本生き残った「かしまの一本松」、震災前は有名なサーフィンスポットであったが、現在は工事用車両が目立つ「シーサイドパーク」、さらには一般車両通行可能区間から浪江町の現状を見学した。移動中には津波被害を受けたままの家屋や商店も散見された。この後、石仏群や県天然記念物の大スギで知られる南相馬市小高区の大悲山や、震災や原発事故を乗り越えて復活した相馬野馬追の会場を見学した。そして道の駅南相馬に戻り、最後に地元で暮らす人々の現状と思いについて、安部さんのお話を伺った。

安部さんの言葉の中で「ここにいても地獄、遠くに逃げてても地獄」というものがあった。これは一方で、震災・原発事故以来3年半以上経ってなお、復興ばかりか復旧もままならない「ここ＝被災地」の現状を表している。ただ同時に、「逃げた先＝非被災地」も地獄とすれば、その原因の一端は被災者への非被災者のまなざしにもあるのではないだろうか。被災者という「少数者」に対する非被災者という「多数者」のあり方を問うこと、「原発事故被災地フクシマ」という括り方では収まらない、福島で暮らす（暮らしていた）人々の多様な現実を多様なものとして理解すること、これらはまさに本学会に関わる問題ではないかという思いを強くした。

報告者：湊邦生（立命館大学）

パネルディスカッション 1 「多文化関係としてのポストコロニアル」

パネルディスカッション 1 では、「マイノリティと災害 FM」をテーマに 5 名のパネラーとコーディネーターによって活発な意見交換がおこなわれた。吉留先生がパネルの目的について説明をおこない、各パネラーがそれぞれの立場から、災害時におけるメディアの役割について意見交換をおこなった。

FM わいわいの代表理事を務められる日比野氏は、コミュニティラジオ局を巡る所有権について「コミュニティの人々が所有、運営、参画する」ことを理想としつつも、自由に放送できるわけではない現実について指摘がおこなわれ、一つの象徴として、60 年前の電波法による規制について、コミュニティラジオ局の役員で外国人が占める割合が制定されている事実をあげ、この分野で外国人がマイノリティ扱いを受けていることか報告された。

富岡町社会福祉協議会職員、富岡町生活復興支援「おだがいさまセンター」、おだがいさま FM ラジオの吉田氏は、自分の町ではなく、郡山市で立ち上げた経験について披露し、ラジオは単なる情報伝達だけではなく、「温かみ、ぬくもり」を伝える媒体であり、ラジオ局立ち上げを女川市の関係者から相談を受けた際の「おもしろいことをしないと人が死ぬ」との一言に衝撃を受けた経験を語ってくれた。

伊藤チャリト、佐藤ジェニファー氏の経験を紹介するテレビ番組が放映された後、フィリピン人と日本人を結びつけるラジオ局の役割について説明がなされた。東日本大震災を経験し、フィリピンに帰りたいという寂しさを忘れさせてくれる「葉」としてのラジオ局の機能が論じられた。災害地域の方々がラジオ局とどのように関わり、かつ、災害時に果たすラジオ局の役割について会員がその実態を知る良い機会となった。

報告者：小坂貴志（神田外語大学）

パネルディスカッション 2 「排除の構造と私たちの役割：被災地とヘイトスピーチ」

私は 10 年以上、自分が育った岡山の在日コリアンの若い世代への聞き取り調査を行ってきた。彼・彼女らの多くが家族や親戚以外の在日コリアンの知人はいないという非集住的環境で育ってきたものばかりだ。インタビューを通じて私が困惑したのは、彼・彼女らの多くが「差別をされたことはない」と答えたことだった。その言葉にはある種の「実感」が込められているのは分かった。でも、聞き取りを続けていくうちに、交際や就職という人生の様々な場面で差別を経験していることが述べられていくのだ。極めて暴力的なかたちをもってヘイトスピーチが明らかにしたのは、そういった諸個人に押しつけられながらも不可視化されていた差別が脈々と継続していたという事実だ。そしてこのことの意味は、辛淑玉さんが「怒り」をもって伝えてくれたように、

在日コリアンだけに限定されるものではない。福島もまたその渦中にあるのだ。「他者」への寛容性の低さや暴力は、自己や社会全体そのものに向けられたものでもある。しかもそれがこの社会に自然と蔓延しているというよりは、極めて人工的なものであると感じている。グローバル化する都市社会的な環境においては、監視カメラやセキュリティの環境デザインを通じてヨソモノは排除されていく。そのような不寛容（Zero-tolerance）かつグローバルなデザインこそが、在特会などの排外主義をサイバー空間からストリートへと招いた土壌でもあるのだ。パネルセッションや会場とのディスカッションを通じたやりとりから、この人工的につくられる嫌悪から多様性を守り育て継続していくことの大切さを改めて確認させてもらった。

報告者：川端浩平（福島大学）

第13回年次大会特集

オープンフォーラム 「福島で生活するとは？」

会員諸氏の中には「哲学カフェ」という活動をご存知の方もいたと推察しますが、オープンフォーラムとはいえ、学会という型の中で、100名弱のフォーラム参加者を含んだ本フォーラムは新鮮なものであったと感じております。これは単に「物珍しい」ということではなく、いかに学会（学界）が特定のコミュニケーションの型に従事しているかという点に、報告者を含めた参加者の意識を向ける、相対化の「仕掛け」、実践であったという点にあったのではないかと考えます。

オープンフォーラムは、福島大学の小野原雅夫先生がファシリテーターを務め、同じく福島大学の田村奈保子先生が話題提供者として口火を切る形で始まりました。オープンフォーラムは「てつがくカフェ@ふくしま」の進め方に沿って行われ、たとえば「〇〇先生」などの敬称の使用は禁止され、「〇〇さん」といった呼称の使用が求められました。また、発言する際には、「所属」を述べることはしないようにとの指示もなされていました。話題提供者の田村先生からは、主として他者を対象化することを基本とする研究という営みに従事する者が、一変して、対象化されることになった、すなわち、福島に住む者として、外部の眼差しの向けられる者となったことが語られました。そして、誰もが常に、「当事者」の「外」の者となりうること、その存在によって誰かを囲い込むことになりうるという気づきが提起されました。

フロアはフォーラム開始当初は静まり返っていましたが、これはひとつには、学会のフォーラムという「型」に揺さぶりがかけられたことによる聴衆の戸惑いがあったように思われます。ファシリテーターの小野原先生は、フォーラム中、『先生』はやめてくださいね」といったように、繰り返し「カフェ」の規範を述べることで、「学会」というコンテキストが立ち上がり、学術的ディスコースが優勢となる状況とならないよう、ファシリテートされていました。開始当初は沈黙が長く続いたフォーラムでしたが、ぽつり、ぽつりと発言が出るようになり、フロアからは、自分のことばで、自分の立場から、実に多様な語り紡ぎだされ、結果、「オープン」さが十全に発揮されたフォーラムとなったように思います。今日の認識論的多様化が著しい中、互いの依って立つ哲学的の違いを理解することが望まれるにせよ、（報告者を含め）「言うは易し」である

ことが少なくありません。そのため、とりわけ多様な背景をもつ会員を擁する本学会において、会員同士の豊饒な多様性の対話を通じての当学会ならではの知の創出への試みとして、「哲学カフェ」スタイルによる対話の場の創造をしていくことの可能性を見たオープンフォーラムであったと考えております。

報告者：岡部大祐（青山学院大学 大学院）

石井米雄奨励賞審査コメント

石井米雄奨励賞審査委員会 委員長 小松照幸

今回の石井米雄奨励賞には、次の2名の若手研究者が受賞されました。

日本の「不就学」外国人児童生徒 —地域日本語ボランティア教室の諸相より—

奴久妻駿介（一橋大学 大学院）

本研究は、「不就学の外国籍の子供たち」にスポットを当て、先行研究、日本語学校へのアンケート、教育委員会への聞き取り・フォローアップなど多面的な方法論を駆使して、この問題に迫ろうとしている。研究課題の発生現象と要因をマイクロとマクロの両側面から、社会学的研究方法により解き明かすと言う目標と方法は重要である。今後の課題については、研究者自身が明記してある通り、サンプルの少なさ、社会システムとしてのマクロ的課題（日本の教育システム、行政の力学などによる強制力）と、生活環境としてのマイクロ的課題（家族、学校、地域）の更なる探究が必要であろう。その際、「上からの不就学」と「下からの不就学」と言うネーミングの適切さも、再検討が必要と思われる。学会にとっても、社会と文化的課題をマクロとマイクロの関係性から解明することは、重要な課題であり、今後の研究成果が期待される。

「多文化共生社会」を目指した日本語教室 —日本語ネイティブとノンネイティブによる取り組みを中心に—

S. M. S. T. ランブクピティア（九州大学）

〈支援—被支援〉〈ホスト—ゲスト〉の関係性におけるパラダイムシフトの可能性をはらんだ、ひじょうに発展性を感じさせる発表であった。「地域日本語教室」における教えるものと教わる者との関係性における「対等な関係作り」の視点とモデル構築の社会的意味は大きい。しかし「多文化共生コミュニティーづくり」と「学習者のニーズに応じた日本語教育」の関連は明確でなく、また、データの種類が関係者へのアンケートのみであるため、十分なデータ分析ではないかもしれない。研究発表を全体として見た場合、議論または導き出された結論は一貫しており、論拠もきちんと明示されている。

日本人の伝統的な「上下関係」の社会意識が、多文化共生時代へ向けて、教育の現場で、より望ましい相互に学ぶ「対等な関係性」へと意識の変化を促せるか、研究の進展が期待される。

第 14 回年次大会概要

第 1 回年次大会は、11 月 14 日（土）・15 日（日）の両日、岡山大学（岡山県岡山市）で開催されます。大会前日の 13 日（金）には、プレカンファレンスを予定しております。大会の詳細や発表募集（2015 年 5 月 1 日に開始を予定）については、順次学会ホームページでお伝えしていきます。

大会テーマ

「グローバル世界と多文化関係：まちづくり、ひとづくりが拓く明日」

本大会では、日本と海外の都市が直接つながり、世界のローカルとローカルが無数につながる、いわばグローバルな視点の持つ可能性に思いをはせてみたいと考えています。開催場所の岡山県は、国際貢献に力を入れている地域の一つでもあることから、地域企画の一つとして AMDA（アマダ）の「特別講演」を準備しています。AMDA は、災害や紛争発生時、医療・保健衛生分野を中心に緊急人道支援活動を展開する認定特定非営利活動法人で、世界 30 カ国の支部のネットワークを持って、多国籍医師団を結成しています。

岡山県はまた、地域中小企業の海外進出意欲が高く、地に足の着いた多文化共生を目指す地域でもあります。そのため、社会学など様々な領域の研究者が集う、学際的なシンポジウム「地域をベースに多文化共生を考える」の開催を予定しています。

そのほか、留学交流や留学生教育に接点を持つ研究者と対話する、テーマテックポスターセッション「留学生とまちづくりの未来」を企画しています。

大会前日のプレカンファレンスでは、岡山県新見市の公設国際貢献大学校から講師を招いて、国際協力・国際貢献活動のワークショップを実施する予定です。具体的には、「シミュレーション：被災地への支援活動等を想定した参加型の模擬演習」を入門者向けに、多文化性を織り込んだ形での実施を予定しており、我々の理論と実際をつなぐ橋渡しの好機となることを願っています。

第 14 回大会準備委員会



■北海道・東北地区研究会

日時：9月13日（土）13:30-17:00

会場：北16条キャンパス 354教室

1. フェアトレードー異文化におけるそれぞれの形ー

報告者：石丸オリエ氏

キリスト教団体の慈善的活動から始まったと言われる欧米でのフェアトレードを取り上げ、社会に根付くまでの流れについて歴史・経済・宗教・文化など多方面からの考察を行った。また、これらの考察を基に、欧米と



は異なった文化土壌を持つ日本におけるフェアトレードの現状を分析し、さらに今後フェアトレードを定着させる方法についてフロアと共に議論した。社会問題に対する意識が低く、企業の社会的責任（CSR）を厳しく問うという態度が欠如しているなど、石丸氏が指摘した日本に住む人々の抱える問題点は、フェアトレードが広がらない原因だけでなく、その他、原発事故と原発政策、ヘイトスピーチ、人種差別など、近年頻発する他の社会問題とも根本的にはつながっており、このように実社会との関連を視野に入れた研究の必要性を強く感じさせられた報告であった。

2. 日本と韓国におけるポライトネス・ストラテジーの文化的相違

ー「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の使用を事例としてー

報告者：李鳳（イボン）氏

日常会話で多用される「思う」の意味が、話者と聴者の社会的距離（D）、相対的力（P）、相手にかかる負荷度（R）により大きく異なることに着目した研究でした。一例として、「思う」が一方ではコインの裏表のような「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」との折り合いを付ける「ヘッジ」となり、他方では重要な意思表示には不適切であるという話題提供がありました。言語と文化の分かれ難い絆を再認識した時間でした。

3. 箱館英学と大島高任

講演者：中村公一氏（釜石ぎんどうの会 会長・元釜石市立図書館長）

中村公一先生は、日本近代鉱業の父と呼ばれ、その技術面において先駆者的役割を果たした大島高任（南部藩奥医師）が、幕末文久年間に北海道の箱館の地で洗礼を受け、自からもその発展の一翼を担ったという知られざる一面にフォーカスを当て講演を行った。

中村先生によれば大島は、今風でいえば異文化間のミディエーターであると同時に異文化と日本との風通しをよくし、異文化交流を推進しようとした人物でもあった。また、大島は、箱館奉行所が招聘した二人の米国人、ラファエル・パンペリーとウィリアム・ブレイクから鉱山開発の技術を学ぶかたわら、箱館奉行の命で、武田斐三郎と共に坑学校を開業し、全国各地の俊英たち

を指導し、日本近代鉱業の基礎を築いた人物である。

文責：御手洗昭治（札幌大学）

■関東地区研究会

日時：5月31日（日）12:30-15:30

会場：青山学院大学

テーマ：コンフリクト・マネジメント入門

話題提供者：鈴木有香氏（早稲田大学紛争交渉研究所招聘研究員、関西大学大学院非常勤講師、異文化教育コンサルタント）

2014年5月31日、青山学院大学にて多文化関係学会・関東地区研究会が行われました。発表者はエネルギッシュな鈴木先生でした。発表のテーマは、コンフリクト・マネジメント（ADRとミディエーション）でした。

私たちは英語教育を専攻しているため、コンフリクト・マネジメントの知識に乏しく非常に緊張していましたが、発表の中で鈴木先生のテクニックがたくさん盛り込まれており、興味深く参加することができました。冒頭ではチェックインという活動が行われました。

チェックインでは、30秒間自分の思ったままに話をするという活動でした。声を出し、体を動かすことによって緊張を和らげることができました。私たちの学会のイメージは、発表者の貴重な報告を傾聴するというイメージが先行していましたが、チェックインという活動によって主体的に発表に参加することができたと感じました。

コンフリクト（紛争）と聞くと国家間紛争や内戦などの大規模なものをイメージしてしまいがちです。しかし、今回お話にあったコンフリクトとは人間関係の対立や心理的な矛盾・葛藤など私たちの日常にも起こりうるものが主として扱われていました。

現在コミュニケーション能力は至る所で重要視されています。今回のコンフリクト・マネジメントはコミュニケーションと密接に関わっていました。コミュニケーションによって勝つか負けるかを決めるのではなく、成功の循環モデルとして「関係→思考→行動→結果」がコミュニケーションスキルになります。この循環モデルが肯定的に働けばコミュニケーションも肯定的になり、一方否定的に働けばコミュニケーションも否定的になってしまいます。

人と関わっている以上、コンフリクトは避けられない場面があります。否定的なコミュニケーションがコンフリクトを生み出し、その対話の制御・援助をするのがミディエーションの役割となります。ミディエーターは、双方の利益・双方の関係が両方とも満足いく形になるよう中立性を持って対処しなければいけません。しかし、解決は当事者の手で行わなければなりません。当事者が説得されるのではなく、納得することが重要です。

鈴木先生が仰っていた「ミディエーションはコミュニケーションのアート」という言葉がとて



も印象に残りました。鈴木先生の発表は現代を生きる我々が直面するコンフリクトへのひとつの解決策になると思います。

文責：佐藤浩希・大島和真（玉川大学文学研究科英語教育専攻修士課程）

■関西・中部地区研究会（その1）

日時：2014年7月19日（土） 17:00-19:00

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス 1402 教室

テーマ：チェルノブイリ被災者支援とフクシマ支援

話題提供者：戸村京子（特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部）

2014年度年次大会（福島大会）の総合テーマに関連するお話として企画した。1990年に緊急支援を始めた「チェルノブイリ救援・中部」の活動は、期せずして福島支援とつながっていった。チェルノブイリ支援活動から福島支援への結びつきは、もともと再生可能エネルギーの活動に始まるものであり、そこからチェルノブイリ支援が始まった。現在、福島県でも行われている菜の花プロジェクトは、放射線を除くことがいかに難しいかを示すものであるが、土壌の改良と菜種油の生産、再生可能エネルギーの開発を合わせたもので、空地利用の一つとしては今後も有効な試みである。チェルノブイリ支援から得られた放射線量と危険地域の区分についての資料からも、日本の危険地域への対応が、放射線への危険の認識が低い（甘い）ことを示しているとの指摘であった。発表内容は以下の通り。

1. 「チェルノブイリ救援・中部」の立ち上げと救援活動
 - ・任意団体の市民運動—緊急救援を開始（1990年4月～）
 - ・緊急救援から自立支援へ—「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」
 - ・心の支援—クリスマス・新年のカードキャンペーン
2. 東日本大震災／福島原発事故の支援活動
 - ・支援の模索—放射能測定
 - ・放射能測定センター開設—農産物・土壌・水の放射能汚染状況
 - ・南相馬市・浪江町の放射能汚染マップ作成
 - ・チェルノブイリ被災者からのフクシマ支援—義捐金・メッセージ・放射能測定器の贈呈
 - ・チェルノブイリとフクシマ—NGOの国際協力は双方向の支援へ、
 - ・クライナから心の支援—クリスマス・新年のカードキャンペーン
3. 福島復興・再生への挑戦
 - ・南相馬の農地再生へ向けて—「菜の花プロジェクト」
 - ・「菜の花プロジェクト」と再生可能エネルギー（バイオディーゼル燃料・バイオガス）
4. 支援活動での問題点・課題
 - ・ウクライナ事情、問題点・課題

- ・日本での問題—除染
- ・広域避難者の問題（愛知県の事例）
- ・再稼働への動き
- ・コミック「美味しんぼ」の論争と表現の自由—放射能被害と差別

参加者 7 名（関西学院大学経済学部からの学会開催補助を得た）

懇親会 5 名（土佐料理「司」にて）

文責：中川慎二（関西学院大学）

◆.....◆

■中国・四国地区研究会

日時：2014 年 11 月 15 日（土） 10:00-12:00

場所：岡山大学津島キャンパス 文学部 1 号館 2 階 2 セミナー室 2-4

テーマ：国際社会への発信力—研究を多文化へ届けるには—

話題提供者：シミッチ・山下・ミラ（岡山大学研究員、岡山大学・岡山理科大学非常勤講師）

シミッチ・山下・ミラ先生は、言語と文化の関係を研究され、多文化関係学会で活躍中の研究者です。複数の大学で教鞭をとられ、大学院生を対象に英語で研究発表する力を付ける授業や、グローバル人材育成コースの学部生を対象に英語で専門科目を講義する授業、専門分野の英語による文献を講読していく授業などを実践されています。国際社会への発信力を磨く教育の模索が続く日本の大学で、その最前線の開拓者のお一人です。日本人学生や留学生に、国際学会での発表や海外雑誌への投稿を促すには、どのような指導や助言が必要で、また効果的なのか。語学の授業でなく「専門」の授業を英語で行う場合、どのような工夫が役立つか。これらについて、豊富な体験例をもとに語っていただきました。学会員のみならず非学会員の方も参加していただき、指導方法や学生の反応などについて積極的な質疑がありました。外国で発達してきた指導法を、日本に導入するときの目標や要求水準の設定、課題の選択などの文化的側面への注目は、本学会らしい今後の課題のように思われました。国際社会への発信力を備えた多文化対応の人材育成への期待と課題を、ともに考えていく好機でした。

文責：田中共子（岡山大学）

◆.....◆

■九州地区研究会

日時：2014 年 9 月 13 日（土） 14:00-17:00

会場：九州大学西新プラザ 2 階多目的室

テーマ：日常生活の中の見えざる差別・偏見・ステレオタイプ

—他者理解とコミュニケーションの課題を考える—

Invisible Discrimination, Prejudice, Stereotype in the Everyday Life :

Understanding and Communication with Others

話題提供者（1）：李由紀（り ゆき）氏（九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻修士課程 2 年）

話題：屠畜・解体業生活史へのまなざし

—北九州食肉センター企業組合員からの聞き取りを中心に—

Looking from the Life History of People Working in a Slaughterhouse :
A Fact Analysis on Slaughterers in Kitakyushu

話題提供者 (2) : 野中昭彦氏 (中村学園大学流通科学部准教授)

話題 : 高齢者に対する負のステレオタイプ

Negative Stereotypes toward Older Adults

九州地区研究会では、多文化関係学会の本年度第13回の年次大会(於:福島)のテーマ(『他者』に対する社会的排除と差別:少数派の視点から考えるアカデミアとメディアの役割と責任)に関連したテーマとして、「日常生活の中の見えざる差別・偏見・ステレオタイプ」というテーマを設定することとした。『他者』に対する社会的排除と差別については、多文化共生社会をめざすという観点から、様々な分野における研究の蓄積がなされてきているものの、「差別」や「人権」の問題を正面から考えるのに対しては抵抗感を抱く人も多い。そこで、今回は「食肉」や「高齢者」をキーワードとして、日常生活のレベルから差別・偏見・ステレオタイプが生じるメカニズムについての理解を深め、他者理解とコミュニケーションを促進する方策を参加者とともに考えることとした。

最初の話題提供者の李由紀氏は、フィールドワーク先である北九州市立食肉センターにおける屠畜・解体業に従事する職人への聞き取りや、ドキュメンタリー映画『ある精肉店のはなし』上映会後のアンケート調査、北九州市の小学校における「いのち・食・労働・差別」を子どもたちと考える授業への参加をもとに、「日々当たり前のように食肉を口にしてきた私たちが、屠畜場やそこで働く人びとに対してどのような視線を向けてきたのか」を問いかけ、私たち消費者自身が、「屠畜場がいのちの連鎖する瞬間に立ち会える場所のひとつであるということ」を正しく理解する必要があることを語った。また、北九州市をはじめとし、西南日本では部落差別と屠畜・解体業差別という重層構造の差別状況が存在しているが、現在も残るそれら諸問題を解決していくには、屠畜・解体業に携わる当事者から直接話を聞いたり、屠畜場を直接見学することが必要だが、現状ではそういった機会を作ること自体が困難であるため、李氏自身が彼ら職人たちの生活史を丁寧に聞き取ることにより、子どもたちに伝えていくことの重要性が提起された。

次の話題提供者の野中昭彦氏は、5年にわたり高齢者施設を訪問し、介護士たちと高齢者のコミュニケーションを観察してきた調査結果をもとに、高齢者に対する負のステレオタイプ(たとえば、頑固、気難しいなど)が生じる要因や場面について、参加者とのやりとりを通じて具体的な事例を紹介した。たとえば、高齢者に対するペトロナイジング(patronizing)スピーチ(簡略化、明確化、幼児語など)や、常語、ため語がひきがねになり、うつ病になるケースなどの問題点が指摘された。ポライトネス理論の観点から見れば、相手との社会的距離を縮めるための調整、相手の話し方に合わせるといったことはコミュニケーション上、必要ではあるが、同時に相手の「面子をたもつ」ことの重要性についても言及がなされた。最後に、高齢者に対する正のステレオタイプが話題として取り上げられ、社会的接触の欲求から見ても高齢者が社会参加していくことは必要不可欠なことであることが提起された。また、高齢者が地域社会作りや経済活性化を牽引している事例なども紹介され、高齢者が社会に果たす役割の重要性についても議論がなされた。

参加者は 19 名で、東京、北九州、熊本からの参加もあり、小学校、高等学校、日本語学校、看護大学の教員、大学職員など、通常の研究会よりも多彩なメンバーの参加となったことが特徴であった。

文責：松永典子（九州大学大学院比較社会文化研究院）

2014 年度 多文化関係学会理事会 議事録（抄録）



■第 1 回理事会

日時：2014 年 5 月 31 日（土）12:00-12:30

場所：青山学院大学（青山キャンパス）ガウチャーホール 5 階 第 13 会議室

出席理事数 12 名（委任状出席を含めて 3 分の 2 以上出席の定足数を満たす）

出席：赤崎、石黒、大谷、海野、抱井、小坂、今野、田中、中川、舛谷、山本、李、
河野（オブザーブ参加）

欠席：小田、笠原、寛、松永、守崎

議長：小坂、議事録 小坂

報告事項：

(1) 会長挨拶（抱井）

- ・渋谷理事の退会にともない、新たな財務委員として参加いただく吉田財務委員の紹介があった。

審議事項：

(1) 2014 年度予算案（石黒）

2014 年度予算案が提案され、審議の結果、承認となった。

(2) そのほか

- ・学術誌編集委委員長に対し、現在会長・事務局長のみアクセス可能な会員データ（CSV ファイル）へのアクセスを許可することが提案され、審議の結果、承認となった。なお、CiNii、J-Stage（J-Stage Lite）への登録手続き等についての意見交換がなされたが、時間の都合で継続審議となった。
- ・PACA2014 における PACA-JSMR のジョイントセッションを、オフィシャルな学会としての企画から、個人の会員による企画へと位置づけを変更することが提案され、審議の結果、承認となった。
- ・年次大会運営委員会より、大会開催に向けて趣意書が提案され、審議の結果、承認となった。

以上

■第2回理事会

日時：2014年8月2日（土）13:00-17:30

場所：青山学院大学（青山キャンパス）ガウチャーホール5階 第13会議室

出席理事数7名（委任状出席を含めて3分の2以上出席の定足数を満たす）

出席：赤崎、笠原、抱井、小坂、中川、山本、守崎

欠席：石黒、大谷、今野、小田、寛、田中、舛谷、松永、李

議長：小坂、議事録 抱井

報告事項：

(1) 事務局(および財務)関連（石黒）

・会員数

一般会員 250名

学生会員 98名

シニア会員 0名

協賛会員 1名

※海外会員 6名(一般会員5名、学生会員1名)※上記の数字に含まれる

総数 349名

・財務委員会の引き継ぎ完了(5月末)

学会通帳のインターネットバンキングを開始。

併せて、年次大会用目的別通帳もインターネットバンキングを開始。

年次大会予算50万円を目的別通帳へ移動(8月1日)。

*領収書など財務関係の書類は、すべて石黒理事と吉田財務担当委員の二人に送ることをMLで周知徹底することが確認された。

・住所不明によるニュースレターの返送

住所不明によるニュースレターの返送8件あり。事務局が会員に新住所を確認し、再送する予定。

・年次大会用備品

年次大会用備品は事務局に保管してある。

(2) 2014年度年次大会準備状況（大会世話役）

・日時および大会テーマの報告

第13回年次大会概要

日時：2014年11月8日（土）・11月9日（日）

場所：コラッセふくしま（福島県福島市）福島県福島市三河南町1番20号

JR福島駅（東北新幹線、東北本線、奥羽本線）西口より徒歩3分

主催：多文化関係学会、福島大学

プレコンファレンス：2014年11月7日（金）

テーマ：『他者』に対する社会的排除と差別：少数派の視点から考えるアカデミアとメディアの役割と責任

Social exclusion and discrimination of "the other" in Japanese society: The roles and

responsibilities of academia and media seen from the perspectives of minorities

- ・小坂・石黒両理事による福島視察の報告
会場のコラッセ福島が利便性の高い場所にあり、会場の設備も整ったところであるとの報告があった。
- ・小坂・石黒両理事による福島視察の報告
会場のコラッセ福島が利便性の高い場所にあり、会場の設備も整ったところであるとの報告があった。
- ・福島大学関係者との会食の件
プレカンファレンス後に福島大学の先生方と挨拶を兼ねた会食を行うことが中川理事より提案された。
*7日(金)は場所の関係から理事会は開催しない。その代わりに大会前に事前に総会資料の確認・審議などML上で理事会を行うことが確認された。
- ・中川・李両理事による福島視察報告
オープン・フォーラム(「哲学カフェ」)を福島大学の小野原先生(倫理学)を中心に行うことが中川理事から報告された。「福島に暮らすこととは」をテーマに会員とともに議論する場を提供する予定。
プレカンファレンス、パネルディスカッションの予定が報告された。
- ・大会1日目の懇親会の時間と場所
大会1日目の懇親会の時間と場所についての報告がされた(コラッセ福島 12F きいちご。18:05~20:30)。

(3) 各種委員会報告

- ・ウェブ管理・広報委員会(今野)
なし(欠席)
- ・ニューズレター委員会(守崎)
6月にニューズレターが無事発行されたことが報告された。

(4) 地区研究会

- ・北海道・東北地区研究会(御手洗)
なし
- ・関東地区研究会(山本)
鈴木有香先生による研究会が開催された旨が報告された。研究会後は茶話会が持たれ、参加者間の交流の機会がもたれた。次号のNLに報告書・写真が掲載される。秋の研究会については未定。
- ・関西・中部地区研究会(中川)
「チェルノブイリ被災者支援とフクシマ支援」(2014.7.19)に研究会が開催された旨が中川理事より報告された。
- ・九州地区研究会(松永)
なし

- ・中国・四国地区研究会（田中）

なし

(5) 学会誌編集委員会（笠原）

- ・4月末に設定された投稿期限がゴールデンウィーク明けまで延長され、結果的に15本の投稿があったことが笠原理事より報告された。
- ・8月12日（火）第2回編集委員会を行う。採択・不採択・再査読（委員会で新たに査読者を決める）を決定。
 - *コラッセ福島に編集委員会で使用可能な部屋があるかを確認する必要あり。

(6) 選挙管理委員会（松永）

- ・今秋の選挙予定についての報告があった。福島大会で理事会開催が不可能なため、理事互選の対象者と、選挙の手続きを決めた。互選対象者の要件は、(1) 1期目であること (2) 現段階で継続性が必要な役職であること。結果として、事務局の石黒理事、WEB・広報委員の今野理事、編集委員長の笠原理事の3名が互選対象となることが決定した。
- ・年次大会2日目の11月9日（日）の昼休みに理事互選のための理事会を行うことが併せて決まった。

理事互選の結果を受けて、11月中旬に会員MLにて自薦・他薦を募る（11月中締切）。推薦者の確定を12月初めに行い、選挙（被選挙権表と推薦リストおよび返信用封筒と送付状を同封し会員に郵送）。12月中選挙投票締切。1月中旬ごろまでに開票作業終了、理事（15名）・監事（2名）本人の了承を得て決定。

 - *総会において、理事立候補者募集（自薦・他薦）の呼びかけをすることが赤崎理事より提案された。その際、役職を想定した上で候補者を募ることが望ましいという意見が、山本理事より提案された。

審議事項：

(1) 理事の人数

- ・理事の人数については現状維持で15名とすることが審議の上決定した。各委員会に理事は委員長として原則1名のみ。編集委員会のみ副編集委員長として理事をもう1名置く。
 - *HPの英語化や、英語論文の査読および執筆フォーマットのチェックは、基本的にアウトソーシング化することで、英語化担当部署をなくしていくことが合意された。

(2) 年次大会のポスター

- ・年次大会のポスターをどのように配布したらよいかについての審議がなされた。結果として、コラッセ福島、福島大学、国際交流協会、福島近隣の各大学、および福島近隣の会員の方々に、告知に協力してくださるようポスターを送ることが決まった。

(3) 広告獲得

- ・広告獲得の協力の呼びかけがなされた。現時点では4件の広告を獲得済み。

(4) リレー連載

- ・「福島と私」をテーマにリレー連載を行い、エッセイを ML で会員に送ることが決定。字数や文体は自由。

(5) ニュースレター委員会「年次大会特集号」(守崎)

- ・以下の依頼が守崎理事よりなされた。
 - (1) 大会運営世話役は、大会に関する原稿執筆を参加者に依頼する。
 - (2) 石井奨励賞の審査担当者を選ぶ。
 - * 石井奨励賞の基準を明確にし、選考の際は基準に合致した論文を選ぶよう注意が必要な旨が笠原理事より指摘された。
 - (3) 各地区研究会の委員には今後の研究会の案内の送付が要請された。

(6) そのほか

- ・ニュースレターの電子化については継続審議して行くことが確認された。
 - * メールングリストのメールアドレスがアップデートされているかを今野理事に確認していただく。

以上

■第3回理事会

日時：2014年11月9日(日) 11:40-11:50

場所：コラッセふくしま 4F 402A 会議室

出席理事数 11 名 (委任状出席を含めて3分の2以上出席の定足数を満たす)

出席：赤崎、石黒、大谷、笠原、抱井、小坂、田中、中川、松永、山本、李、久米(監事)

欠席：今野、小田、寛、舛谷、守崎

議長：小坂、議事録 小坂

報告事項：

なし

審議事項：

(1) 理事の承認

- ・2014年度第2回理事会で互選が提案された事務局の石黒理事、WEB・広報委員の今野理事、編集委員長の笠原理事の3名、また、2015年度の年次大会実行委員長として決まった田中理事の互選結果に対する審議がおこなわれ、挙手による投票の結果、全会一致で承認された。

そのほか：

- (1) 年次大会における投稿論文の発表資格要件

- ・福島大会において、学部生による発表がおこなわれていた件に関して、年次大会における投稿論文の発表資格要件、審査基準及びその方法と発表者の所属明記の方法（大学院生に対しては院生であることが明記されるのに対して、今回の例では「〇×大学」が学部生の所属として使われており、教員と学部生は所属だけでは判別不可）についての再検討がおこなわれるべきであるとの意見が出され、継続審議事項として次年度以降の理事会にて審議することが提案された。

以上

お知らせ

地区研究会のご案内

★北海道・東北地区研究会（予定）★

日時：8月1日（土）14:00～

場所：藤女子大学 北16条校

*詳細については今後決定

Web委員会より

会員登録情報更新のお願い

Web管理・広報委員長：今野貴之

≪登録事項の更新をお願いします≫

■会員専用サイトでの所属・住所等の変更

ご所属・e-mail アドレスなど会員登録情報の更新をおねがいたします。会員登録情報の変更は会員各自で行えます。登録情報を更新しなければ学会からのお知らせが届きません。登録情報に変更があった場合は更新をよろしくお願い致します。また、e-mail アドレスについては、現在使用されていないアドレスの方がいらっしゃいますので、今一度ご確認ください。なお、ID やパスワードがお分かりにならない方は今野（takayuki.konno@meisei-u.ac.jp）宛に御連絡下さい。

■登録情報変更手順

1. 多文化関係学会ホームページ（URL：http://www.js-mr.org/）
2. 学会員専用サイト（会員番号・パスワードを入力し、ログインボタンをクリック）
3. 登録情報更新をクリック
4. 変更点を修正し、一番下の更新をクリック

学会誌について

学会誌編集委員長：笠原正秀

学会誌第11号、すでにお手元に届いていることと思います。第11号には論文13本・研究ノート2本、計15本のご投稿をいただきました。厳正なる審査を経て、論文5本・研究ノート1本、計6本の玉稿が掲載される運びとなりました。ご投稿いただいた会員のみなさま、そして査読に

あたられた会員・非会員のみなさまには、この場を借りて心より御礼申し上げます。

現在、第12号作成に向け、原稿の受け付けを開始しております。締切日は2015年4月30日(木)です。「執筆要領」「投稿規定」は第11号巻末、あるいは学会ウェブサイト (<http://www.js-mr.org/journal/>) に掲載されております。これまでのものに若干の修正を加えておりますので、ご投稿に際しましては、必ずご一読ください。

会員新著紹介

『ケネディの言葉～名言に学ぶ指導者の条件～』

御手洗 昭治編著／小笠原はるの著（新報社，1,400円）

50年の時を経て、今も生きる JFK の名言。本書は、名指導者として、またスピーチ・メーカーの名人として知られるケネディ大統領の名言集。利害が対立する時、さらに鼓舞したい時、どんな言葉を使用し、人々の心に火をつけることができるのか？本書では、見開き2ページの右側に和文と英文の名言、左側にエピソードと名言が示されており、スピーチ原稿のモデル、指導者に求められる資質を学ぶために是非読んでおきたい一冊。

事務局より

2014年11月に福島県で開催された年次大会は熱気あふれる素晴らしい大会となりました。2015年11月に岡山県で開催予定の年次大会にもぜひご参加ください（詳細は、本学会ホームページにて第14回年次大会第1報をご覧ください）。以下、事務局からのお知らせです。

* 『多文化関係学』第11巻

『多文化関係学』第11巻が出版されました。今年度会費が未納の方には発送されておりませんので、ご注意ください。なお、後日会費を入金された方は、学会事務局 (admin@js-mr.org) までご連絡をお願いいたします。入金を確認後、学会誌を送らせて頂きます。

* 会費納入状況に関するお問い合わせ

会費納入状況に関するお問い合わせは、学協会サポートセンター (scs@gakkyokai.jp) までお願い致します。その際、メールの件名は「多文化関係学会」とし、ご自分の氏名、ID番号、ご用件をお書きください。また、住所・所属などに変更がございましたら、この学会員専用サイトにログインして情報の更新をご自分でしていただくか、学協会サポートセンターにご連絡ください。

* 学会ホームページ「学会員専用サイト」の会員番号とパスワードについて

学会ホームページ (HP) <http://www.js-mr.org/> では、登録情報の更新などを行える「学会員専用

サイト」があります。情報の確認及び更新をお願い申し上げます。学会員専用サイトへのログインには、会員番号とパスワードが必要です。お忘れになった方は、事務局（admin@js-mr.org）までお問い合わせください。

* 学会誌『多文化関係学』の販売

学会誌『多文化関係学』の販売を株式会社インターブックスに委託いたしております。学会誌バックナンバーのご購入をお考えの会員の方々は、恐れ入りますが、今後は学会事務局ではなくインターブックスにお問い合わせください

ホームページ：<http://www.interbooks.co.jp/>

メールアドレス：info_ml@interbooks.co.jp

電話番号：03(5212)4652 ファクス番号：03(5212)4655

なお、学会誌『多文化関係学』の論文は、論文検索サイトCiNiiにおいて順次掲載されております。

新入会員紹介 （敬称略、入会順）

会員資格	氏名	所属	研究分野
一般	松井 一美	立命館アジア太平洋大学	日本語教育
一般	岩下 康子	広島文教女子大学	異文化コミュニケーション、英語教育
一般	八尾 瑞希	株式会社なとり	マーケティング部にて製品企画
一般	久津木 文	神戸松蔭女子学院大学	発達心理学、言語発達、多文化理解
学生	石丸 オリエ	藤女子大学大学院	フェアトレード研究
学生	三原 久世	University of Nottingham	留学生の日本語学習に対する動機付け
一般	岡村 郁子	首都大学東京	異文化間教育学、日本語教育学

※2014年5月1日から2014年10月31日までに入会された方。

関連学会案内

日本コミュニケーション学会 第45回年次大会

会期：2015年6月13日（土）、14日（日）

会場：南山大学（愛知県名古屋市昭和区）

テーマ：コミュニケーションとジャーナリズム

.....
東京大学大学院情報学環教授の林香里氏による学術（基調）講演の他、大会テーマに関連した特別企画を実施し、コミュニケーションとジャーナリズムの問題を多角的な視点から探る予定。

SIETAR Japan（異文化コミュニケーション学会）第30回大会

会期：2015年9月19日（土）、20日（日）

*18日（金）にプレカンファレンスを予定

会場：桜美林大学（町田キャンパス、東京）

テーマ：未来に向けてのダイアログ：戦争と平和を考える

Critical Reflection of War and Peace: Dialogue for the Future

～編集後記～

福島県福島市で開催された第13回年次大会は、これまでの年次大会とは異なり、会場校が大会の運営を担うのではなく、有志の“大会運営世話役”がその役を担うというかたちで開催されました。大会開催に向けて努力いただいた“大会運営世話役”の方々に感謝するとともに、多くの会員の方々の参加により盛況のうちに大会が終了したことを喜びたいと思います。

6月に発行予定の次号NLでは、次回大会（岡山大学開催）の内容についてより詳細にお伝えする予定をしております。それまでは、学会ホームページの情報をご確認ください。

（NL委員会：守崎誠一・大谷みどり・古谷真希）